

福井・一乗谷朝倉氏遺跡

いちじょうだにあさくらし

1 所在地 福井市城戸ノ内町字上城戸・東新町字上城戸

2 調査期間 一九八八年(昭63)四月～十二月(第61・62次調査)

3 発掘機関 福井県立朝倉氏遺跡資料館

4 調査担当者 水野和雄・岩田 隆・吉岡泰英・南洋一郎・

佐藤 圭・月輪 泰

5 遺跡の種類 城館跡・城下町跡

6 遺跡の年代 戦国時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一 乗谷は福井市の東南部に位置する戦国大名朝倉氏の城下町遺跡



(永平寺・大野)

である。これまで合計七四〇〇〇㎡余りの地を発掘調査し、昨年は「上城戸」を対象として約四〇〇〇㎡を調査した。一乗谷の主要部分は一乗谷川ぞいに細長く占地しており、谷がせばまった南北二カ所に「上城戸」「下城戸」という施設を設

けて外部と区画している。その間の直線距離は一・七二kmあり、その内側に朝倉館(朝倉義景の居館だったことが出土木簡から確認されている)・武家屋敷・寺院・町屋など城下町の主要部が存在する。「上城戸」はその南端を区切る施設で、今回の調査によって基底部の幅一六m、長さ一〇五mの土塁とその南裾に連なる同じ長さの濠(幅一五m、深さ三m)が確認された。濠の四カ所にトレンチを入れて底を確認したところ、その西端トレンチの底から木簡二点が出土した。

この濠内からは土師質土器・越前焼・瀬戸美濃焼・青磁碗・白磁皿・染付碗皿・銅銭・銅製鑑や木製品など二九六〇点の遺物が出土した。なお同伴の墨書木製品には『無量寿経』下巻を書写した柿経二点と「ひつなへにや」と書かれた折敷一点があった。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「く多くミ殿 宇左」 213×43×4 031
- (2) 「式丁 たちまち」 (119)×25×4 019

(1)は片面のみに文字が記されている。「まいる」「殿」は中世の書状にみられる独特の書体で記され、全体に墨色濃く、よく書き慣れた筆致で丁寧に書き入れられている。記載内容については上からそれぞれ宛名・脇付・差出と判断される。「たくみ殿」とは朝倉氏の譜代の重臣詫美氏の当主を指すものと考えられる。『越州軍記』の

足利義昭の朝倉館御成辻固の記事によれば、詫美氏の屋敷は上城戸と「斎藤前」の中間に位置したと想定され、本木簡の出土した濠の南隣の地に比定される。「字左」は戦国期にみられる名字と官途とをそれぞれ一字ずつ組合せた人名表記と思われる、今のところ人物を特定することはできないが、朝倉氏の譜代の家臣宇野氏などを想定することも可能であろう。

本木簡はその全体がよく残っており、その上部・中央・下部には三対計六カ所の切込が左右に付けられている。このうち中央の二カ所の切込は表側だけに斜めに切込が入れられている。これらの切込の大きさは約一・二mmと小さく、その様子からみてこの木簡に何か同じくらいの大きさで比較的薄いものを糸で括り付け、それを保護し固定する機能を持っていたものと推定される。

こうした文字内容・形態機能は、例えば書状における「封紙上書き」などを連想させるものであろう。しかし、その名称や使用法などは、書札礼や古文書学上検討の余地がある（なお朝倉館外濠からは隅を切った三角形の板の上部に「和田九郎兵衛尉殿まいる」と墨書したものが出土している。形状からみて折り箱のふたと思われる）。

(2)は下部を欠く。文字は片面にのみ記され、長時間風雨にさらされたらしく、ほとんど墨が残らず文字部分が盛り上るような状態（文字のない部分が風化して減っている）であったが、判読可能である。よく書き慣れた達筆である。記載も簡単で内容も確定しにくいので

あるが、「たちまち」については千秋氏の一族で立町郷（現鯖江市立待）を名字の地とする立町氏の名とみるのが妥当であろう。千秋氏は越前では室町期に越知山地頭職・糸生郷山方・野田郷など丹生郡一帯に所領を持ち、千秋・立町氏は戦国初期の越前の戦況をも左右すると目された在地有力武士であった。本木簡は立町氏と一乗谷の関係を窺うひとつの資料となるものと思われる。

一乗谷からはこれまで多数の木簡が出土しており、朝倉館外濠出土のものは報告書でふれられているが、なおその釈文や内容上検討を要するものが少なくない。そこで本稿では出土した木簡の内容解釈にまで立ち入って報告をした。

9 関係文献

福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XX 昭和六三年度発掘調査整備事業概報』（一九八九年）

（佐藤 圭）

